

平成 29 年度第 1 回愛知淑徳大学人間情報学部講演会報告

演者 図書館流通センター 会長 谷 一 文 子 氏
演題 『図書館のプロフェッショナル
——未来をつくる図書館の担い手になるということ——』

菅 野 育 子*

1 講演会の趣旨

谷一文子氏に学部講演会をお願いしたのは、図書館員として活躍したいと希望する学部生のために新たな機会を与えたいと考えたからである。地方自治体の予算削減によって、公共図書館の専任職員数が減らされ、募集人数も激減する中で、図書館への人材派遣会社に就職することで図書館員として活躍するチャンスがあることを知ってもらいたいのである。図書館流通センター（TRC）は図書館への人材派遣業から、図書館事業への直接参画を果たした。さらに、これまでの図書館サービスに様々な変革を起こした。そのような内容について谷一氏は具体例をパワーポイントに示しながら丁寧に紹介してくださった。以下は講演内容に見出しをつけてまとめたものである。なお、講演の映像記録は学部準備室で貸出可能である。

講演中の谷一文子氏

* 愛知淑徳大学人間情報学部

2 図書館流通センター (TRC) とは

マルゼン CHI ホールディングスの傘下には、図書館流通センター (こののち TRC と略す) とともに、マルゼンジュンク (旧 丸善書店, ジュンク堂書店) に、丸善出版, 丸善雄松堂が含まれている。ホールディングスの株の半分を持っているのが大日本印刷である。つまり、出版業界の印刷会社, 出版社, 書店とともに図書館サービス業が一体となっている。さらに児童書専門書店の岩崎書店や、保育関連会社, グローバルソリューションサービスという IT 企業も関連会社である。

TRC は 1996 年創設され、2000 年ごろから図書館の業務委託を担当している。2003 年に指定管理者制度ができ、公的な機関や施設も予算削減に対応して民間企業の力を借りるようになり、公共図書館も同様に業務委託を進めた。TRC では 2005 年に北九州市立の図書館の指定管理者となったのが最初である。

TRC の仕事は、次の 3 種類からなる。つまり、図書のデータ作成, 図書の納入, コンサルタントである。特に図書データの作成が本業であり、その結果として、我が国の公共図書館の約 9 割以上に、TRC 作成のデータベースを提供している。さらに、TRC の埼玉県新座市の工場では、1 日に約 3 万冊の図書にラベルやバーコードを添付して図書館へ出荷している。

TRC は、図書館の運營業務を 515 館から受託している。そのうち指定管理者制度が 341 館、業務委託が 174 館で、そのためのスタッフは全国で約 7,200 人である。その 7,200 人の制服を新しいものにする際にも、俳優の伊勢谷友介さんのプロジェクトに依頼してスタッフのモチベーションを高めるものにしたのも谷一氏の発案である。

演者である谷一文子氏は大学での専門を生かされ、臨床心理士として勤務された後に、岡山市の司書試験に合格され、学校司書を 2 年間、さらに岡山市立中央図書館の司書を経験された。その後、ご主人の転勤に伴い東京へ転居され、1991 年に TRC に入社された。TRC ではまず図書データ作成、大学図書館の事業、営業職を経験された後に、その手腕を買われて TRC の子会社サポーターズサービスの社長に就任され、2006 年に TRC 本社の社長となられ、現在会長である。

3 愛知県内図書館からの業務委託

愛知県内の図書館では、TRC が指定管理者として豊田市、大府市、名古屋市の志段味や清州、高浜市、常滑市、知多市、武豊市などを担当している。大府市図書館は貸出冊数が日本一の図書館として報道もされた。愛知県内の業務委託では、岡崎市や一宮市といった大規模な公共図書館において、市の職員と共にカウンター業務やレファレンス業務を担当している。他にも、愛知芸術文化センターのアートライブラリといった専門図書館も担当しており、楽譜や美術関係のパンフレットを収集し、利用者からの専門的な質問にもスタッフが勉強しながら対応している。

4 公共図書館の予算不足を補う

我が国の公共図書館は、1998 年にはその予算や職員数のピークを迎えたといえるが、その後は予算も削減され、資料費も減少し、専任職員数も減っていく厳しい状況にある。地方自治体別の資料費を見ると、2,000 万円以下がほとんどを占めているのが現状である。公共図書館向きの本が、年間約 7 万から 8 万タイトル出版されているが、それらを利用者からのリクエストに応じて購入するには、資料費は不足している。このような状況を打開できる試みを TRC は展開している。

2017 年 11 月 1 日にオープンした野々市市の市立図書館は大規模であるが、スタッフ数を少なくして人件費を削減するために「オール IC」化を導入している。図書に IC タグが装備されているため自動貸出、自動返却、

自動予約が可能で、利用者は本棚から図書を取り出し、自分で貸出手続きを行うのである。そのため、職員や TRC スタッフはカウンターで高度なサービスであるレファレンス業務に専念することができる。この「オール IC」化は大府市図書館でも導入しているので是非体験してもらいたい。青森県の津軽市の図書館は自治体の予算が不足しているため、イオンモールの中に設置された。そのため、建築費用や駐車場も不要となった。この図書館も IC 導入によって 6 名のスタッフで運営している。

5 他施設との複合化

山形県のサクランボで有名な東根市の図書館は美術館と市民共同センターとの複合施設である。学芸員との連携でイベント企画を進めている。千葉県八千代市の図書館は、日本図書館協会の建築賞を受賞したが、その館内において無料で託児サービスを始めたところ、予約殺到の状態である。「子どもを持つ親となった時に一番ほしいのは自分の時間」と言われているが、そのような保護者のために、安心して子供を預けて図書館で自由な時間をすごしてもらいたいと考えている。岡山県玉野市の図書館の同じフロアには、キッチンスタジオや研修室があり、そこで開催されるイベントなどに参加した市民が、関連する図書を図書館で読むような機会が増えている。

6 イベントを企画する

北欧ではサイレントルームというスペースを設けて、静かに読書したい人を隔離して、その他の場所では賑やかなイベントを展開している。TRC は海外の図書館を参考にしながら、イベントの企画と実践を進めている。

大和市の図書館では、「図書館で健康になる」という標語を掲げている。市長による「図書館の中に砂場を作りたい」という発案から、ポートルンドというメーカーから遊具を入れ、外で遊ぶところが少ない地域の市民に楽しんでもらい、同時に図書にも触れてもらえるようにしている。この図書館は健康をテーマとした企画を立て、「毎日イベントを行っている」のである。講座型、交流型、ワークショップ型、制作型のイベント、運動や体操に関するイベントや音楽イベントを開催している。特に都会では「孤独な人」が多いとされるが、孤独な高齢者が「図書館に来ることで元気にならないかな」と考えて健康器具も備えている。この大和市図書館は 1 年間で、約 300 万人もの入館者がある。

7 地元とのつながりを大切にする

九州の飯塚市図書館では地元の高等専門学校の教諭や生徒とともに科学イベントを企画している。徳島市の図書館では、地元サッカーチーム VOLTIS の選手が来館し、「自分が読んだ本」を利用者に紹介している。海老名市図書館では、中華料理研究家のウー・ウェンさんに図書館内で地元の農業高校で作られた野菜とお肉を使って中華料理を作ってもらったイベントも開催した。

8 新しい取り組みを考える

アメリカの図書館で流行している「ぬいぐるみのお泊り会」を導入している。子どもが自分の分身のぬいぐるみを図書館に預け、ぬいぐるみは図書館に泊まるといったものである。実際に TRC スタッフは、閉館してから、100 人の子どもたちから預かった 100 個のぬいぐるみを、子どもに適した本と共に撮って、プリントして子どもたちに渡した。子どもはその写真を見て、ぬいぐるみと一緒に写っていた本を読みたいと言い出すのである。子ども読書推進の新しい試みである。藤沢市の図書館では、「ソイ・リンク」という「醤油を借りる」

といった気持ちで、自分のやれることをシェアするボランティア組織の活動も支援している。活動支援を通して、利用者が図書館に来館する新しい仕掛けを考えている。

9 未来をつくる図書館に必要な人材

まず菅谷明子先生の『未来をつくる図書館』という岩波新書を是非読んでもらいたい。読んだ人は感激するであろう。未来をつくる図書館には、小さい時から、友だちとはあまりコミュニケーションがとれなくて、本の世界で過ごしていた人よりも、「本が好き、新しいことも好き、人をつなぐことが好き」といった人材が必要である。谷一氏はTRCスタッフには次の3つを求めている。(1)利用者(市民)を元気にしたければ、自分たちが元気にならなければならない。(2)ホスピタリティ。利用者(市民)が求めていることを考える。(3)幅広い知識と高度な専門性を身に付けること。これらは、「未来をつくる図書館」に必要な人材の条件である。

チーム力も必要である。アメリカの事例のように、ライブラリアンは弁護士、司法書士、会計士、医師といった専門家と繋がって、利用者の課題を解決するために、人脈を作ることができなくてはならない。TRCでも社内のSNSを通じて、情報を共有しながらチーム力を高めている。

これまで紹介されたイベントを企画するには、「全力・勇気・度胸・インスピレーション」が必要である。利用者のためにイベントを開催するためには「当たって砕ける」といった度胸や積極性が必要であり、「もしかして、世の中に必要では？」といったインスピレーションが浮かぶように、いつでもアンテナを張っておくことが大切である。

そして、「プロは早くて美しい」と言われなければならない。図書館員の場合で言えば、情報にたどり着くのが速いことであり、そのためのスキルを身に着けているということである。そして、美しいというのは、真実であること、つまり嘘の情報ではなく正しい情報を提供できることである。

最後に谷一氏は、「未来を作るということは、今をしっかり生きる」ということであり、未来に生きるのだから、今こそスキルを磨き、目指すものを持ってやっていかなければならないと強く語ってくださった。